

## 高知カツオ県民会議 第2回シンポジウム

2017年11月9日(木) 16:30~19:00

高知市文化プラザかるぽーと(大ホール)

### ○司会

皆様、こんにちは。本日は「高知カツオ県民会議 第2回シンポジウム」にご来場いただきまして誠にありがとうございます。

まず、本日のスケジュールを簡単にご紹介申し上げます。受け付けにて配布をさせていただきましたお手元のチラシをご覧ください。この後、ご挨拶に続きまして、基調講演をお二方をお願いしております。その後、休憩を挟みまして、後半は「高知カツオ県民会議の活動について」、パネル討論を行います。終了は午後7時を予定しております。

本日の司会進行を務めさせていただきます。RKC高知放送の井津葉子と申します。どうぞ最後までよろしく願いいたします。

それでは、開会に先立ちまして、主催者を代表し、高知カツオ県民会議会長代理、受田浩之よりご挨拶を申し上げます。

### 開会挨拶



受田浩之(高知カツオ県民会議会長代理・高知大学副学長)

### ○受田

皆さん、こんにちは。ただ今、ご紹介をいただきました高知カツオ県民会議で会長代理を仰せつかっております受田浩之と申します。本日は大変お忙しい中、多くの皆様にご来場い

いただきましたことを、まず、高知カツオ県民会議を代表して心より御礼を申し上げます。

本来でしたら会長でいらっしゃいます尾崎正直高知県知事にご登壇いただいてご挨拶を賜るところでございますが、本日、園遊会で東京に行っておられます。今こちらに向かって帰ってこられているところでございます。今日のこのシンポジウムが終わって交流会がございますけれども、交流会の冒頭のご挨拶には間に合う予定でございます。そういう状況でございますので、代理で私がお挨拶を申し上げることをご理解、ご了承のほどをよろしくお願い申し上げます。

今日、第2回目のシンポジウムを開催する運びになりました。高知カツオ県民会議は、昨年の後半から準備をいたしまして、本年2月9日に第1回目の高知カツオ県民会議、開催をいたしました。そして、その後、4月10日に第1回目のシンポジウムを開催しております。

これまで私ども、この活動に関しては幹事会を中心に、運営であるとか、方針について協議を進めてまいりました。実質的な活動については、これからご紹介申し上げます4つの分科会がそれぞれメンバーを募りまして、毎月、あるいは2カ月に一遍の頻度で活動を進めております。この活動自体がようやく緒に就いてまいりまして、半年ぐらい経過したということで、今日の第2回目のシンポジウムは、この活動自体を皆様にご紹介申し上げるとともに、今後のカツオ県民会議全体の方向性であるとか、目指すべきゴールであったり、こういったところをご議論いただき、またアドバイスをちょうだいしたいという趣旨で開催をしたものでございます。

まず、分科会に関して少しだけご紹介を申し上げます。

1つ目が情報発信分科会です。この情報発信分科会では、このカツオ県民会議の動きを県民運動から全国への運動へと展開すべく、そのツールであったり、中身であったり、これを協議をしていただいております。お手元のチラシをご覧くださいますと、この情報発信分科会で立ち上げていただいたホームページのQRコードがお目にとまるかと思っております。ぜひこのカツオ県民会議のホームページも覗いていただきますと大変ありがたく思います。

この情報発信分科会に続いて、2つ目が消費・漁業の分科会でございます。この消費と漁業の分科会というのは、当然、海で魚を取るという、カツオを取るという漁業の現場の皆様と市場とをつなぐ非常に大切なラインを構成していただいております。ここで例えば、今日も話題になるかと思っておりますけれども、サステナブルなカツオ資源の維持を目指して、例えばMSCの導入であったり、持続可能な漁業、一本釣り漁業であったり、漁法であったり、これを消費者と現場とでつないでいこうという取り組みを重ねております。

3つ目が資源調査・保全の分科会でございます。ここでは、水産庁が中心で太平洋中西部のカツオ資源の調査事業を展開しておられますけれども、その技術的な現状であったり、得られた情報をしっかりと私どもも理解をし、そして、課題がどこにあるかという点について共有をしようとしております。現在、ここのところでは、水産庁の調査事業を後押しするような、われわれとしてできるバックアップの体制があるのではないかということで行動計画をつくりつつある状況です。

最後が食文化に関する分科会でございます。この食文化の分科会においては、カツオのマスター制度を立ち上げるべく、さまざまなカツオに関わる知識や情報をうんちく本の形でまとめていく活動等、展開・発展させながら独自の制度の立ち上げに今邁進していただいているところでございます。あわせて、和食の根幹を成すカツオのだしについても研究を重ねているという状況でございます。

今日は、この分科会の活動についてもしっかりと皆様にご紹介を申し上げようと思っておりますけれども、その分科会の活動をさらに前進していくべく、われわれにとってさらにさまざまな情報を頂戴したく、シンポジウムにおいてはこれからご登壇いただくお二人の基調講演をプログラムさせていただきました。

お一人目は、株式会社シーフードレガシーの花岡代表取締役でいらっしゃいます。私たちも持続可能な食のあり方に関して、例えば MSC であったり、農産物であれば GAP といったものを大切にしていかなければいけないということをいろんなところで伺っているところでございます。

花岡さんは、この持続可能な水産資源のあり方、水産業のあり方ということで幅広く活動しておられますので、こういったシーフードレガシーという、かけがえのない水産資源の維持を通じてわれわれが大切にしていかなければいけないもの、これをレクチャーしていただこうと考えている次第でございます。

あわせて、今日は特別ゲストとして、国際一本釣り基金のジェレミー・クロフォードさんにご来高いただいております。先ほどインドネシアから駆けつけていただいて、そして、私どものこのカツオ県民会議の動きに非常にご関心を持っていただいて、今後、われわれにご支援をしていただけるということで、花岡さんのご講演の中でさらにクロフォードさんにもお話をさせていただこうと思っている次第でございます。後ほどご紹介申し上げます。

それからお二人目に水産庁資源管理部の田中参事官にお越しをいただいております。田中参事官には、今後の WCPFC におけるカツオ資源の国際的な議論の場、来月開催をされるわけですが、ここに向けての日本、あるいは政府の考え方、取り組みについてご紹介いただく予定にしております。

後ほど触れますけれども 12 月の WCPFC には、カツオ県民会議からも合計 7 名のメンバーが出席をすることにしております。こういった WCPFC をめぐってのさまざまな情報を私たちにいただけるということで楽しみにしているところでございます。

その後、パネルディスカッションを予定しております。パネルディスカッションでは、田中参事官と花岡代表にもコメンテーターとしてご登壇いただきます。われわれ、カツオ県民会議とともに WCPFC に出席するメンバーとして、お一人は土佐料理司の代表取締役の竹内社長、そして、お二人目は高知かつお漁業協同組合の中田組合長、そして、あわせてわれわれのカツオ県民会議の極めて強力なアドバイザーのお立場でもあるんですけれども、共同通信社の高知支局長であります西野さんにご登壇をいただき、議論を展開していこうと考えている次第でございます。このパネルディスカッションの中でもクロフォードさんに

コメントいただく時間もつくりたいと思っております。

どうぞ世界的なカツオ資源をめぐるさまざまな状況についてご来場の皆様にも、この最先端といいますか、最新の情報にぜひご注目をいただければと思うところがございます。

最後に、本日のこのカツオ県民会議、主催は県民会議ではございますが、共催として日本カツオ学会にご支援をいただいております。この後、カツオ学会の会長でいらっしゃいます東北大学教授の川島秀一先生にご挨拶を賜ることになりますけれども、川島先生には、カツオ学会としてこのシンポジウムにご支援をいただいておりますことを県民会議を代表して心より御礼を申し上げます。ありがとうございます。

そういうことで、今日、長丁場になりますが、この基調講演やパネルディスカッションを通じまして会場の皆様とともに、また、カツオ県民会議の主要のメンバーとともに、カツオをさらに真剣に見つめ直し、そして、われわれが次の世代にどのようにこの貴重なカツオを受け継いでいけるか、残していけるかに関して議論をし、また、それぞれが当事者として何に取り組んでいけるかを考えていく機会にしたいと思っております。ぜひ最後までご聴講いただければ幸いに存じます。

最後に、今日ご来場いただきました皆様に心から御礼を申し上げまして、開催の挨拶とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

#### ○司会

受田会長代理よりご挨拶を申し上げます。

では、引き続きまして、本日、お越しいただいておりますご来賓の皆様を代表するかたちで先ほど受田会長代理からもご紹介がありました日本カツオ学会会長、東北大学教授の川島秀一様からご祝辞をいただきたいと思います。川島様、お願いいたします。

#### 来賓祝辞



川島秀一（日本カツオ学会会長・東北大学教授）

## ○川島

皆さん、こんにちは。ただ今、紹介していただきました日本カツオ学会会長の川島です。まずは、第2回高知カツオ県民会議の開催、おめでとうございます。

私事になって恐縮なのですが、私は宮城県気仙沼市に生まれ育ちまして、震災の年までここで住んでおりました。皆さん、ご存じのように、気仙沼は生鮮カツオ水揚げ量日本一を、ここ20年間続けております。ただ、震災後、どうも漁期が短くなったような気がします。以前では、11月でも操業している船があったのですが、今年も2つの台風の間にみんな去ってしまいました。

耳にするのは、今年で廃業するような船がいくつあるかとか、そういうことばかりです。この原因が海流の変化というような大きな自然界の問題なのか、あるいは、赤道近辺でのまき網の乱獲によるものか、とにかく三陸沖のカツオは減っている状況です。さらに加えて、餌イワシも不漁でして、三陸の餌問屋の方たちも他地方からの買い回しを持ってきて、何とか間に合わせたというような次第です。

高知県の一本釣り船の特徴として、餌を積み入れるときに船に大漁旗を揚げるということを知っております。また、高知県のある船主さんの話では、カツオとイワシは車の両輪であって、イワシは決して脇役ではないと。そのイワシ自体も厳しい状況になっております。そのような大変な状況の中で、この高知カツオ県民会議が開催され続けるということは非常に頼もしく思っております。

当日本カツオ学会も6年前に発足しましたが、当初から資源の問題を扱ってきております。ただ、資源の問題だけではなくて、カツオと最初に出合う漁師さんとそれを取り巻く人々の声から出発して、餌イワシから鰹節まで、地味ではありますが、そんな一つ一つの分野での問題を取り組んでいただきたいと願っております。それに対しては日本カツオ学会も微力ですがお手伝いさせていただきたいと思っております。

私は、20年くらい前からこの高知県に時々来ておまして、カツオ一本釣りの漁師さんから話を聞いて歩いております。東は甲浦から、西は宿毛沖の鶴来島とか、沖の島まで渡っております。高知県という県の形は、東に室戸岬、西に足摺岬、ちょうど両手を広げて太平洋を迎え入れている姿に似ております。この県だからこそ、カツオを通して海と人間がどう付き合うべきかを考える課題を背負っている県だとも思います。

本日のご講演とパネルディスカッションの深い議論を聞くことができ幸せに感じております。この会議に対する応援メッセージを申し述べまして祝辞に代えさせていただきます。おめでとうございます。

## ○司会

川島会長、ありがとうございました。

では、これより基調講演に移らせていただきます。

本日の基調講演、まず、お一人目は、株式会社シーフードレガシー代表取締役、サステナ

ブル・シーフード・コンサルタントの花岡和佳男様です。「日本の水産業復活の鍵、サステナブルシーフードを考える」と題して講演をいただきます。

花岡様のプロフィールを簡単にご紹介させていただきます。

養殖事業の会社や国際環境 NGO での勤務を経て、2015 年に株式会社シーフードレガシーを設立しておられます。豊かな状態で未来世代にこの水産物を継いでいきたいという思いのもと、企業や NGO をサポートし、あるいは両者をつなぐネットワークづくりに尽力しておられます。

それでは、花岡様、よろしく願いいたします。

## 基調講演①

### 「日本の水産業復活の鍵、サステナブルシーフードを考える」

花岡和佳男

株式会社シーフードレガシー代表取締役、サステナブル・シーフード・コンサルタント、養殖事業の会社や国際環境 NGO で勤務。2015 年に株式会社シーフードレガシーを設立。豊かな状態で未来世代にこの水産物を継いでいきたいという思いのもと、企業や NGO をサポートし、あるいは両者をつなぐネットワークづくりに尽力。



#### 自己紹介

高知カツオ県民会議の第2回シンポジウム、開催おめでとうございます。県でムーブメントをつくって、それを日本全国に広げていく、太平洋に広げていく、素晴らしい活動だと思います。

私たちシーフードレガシーは、名前のお通り、海洋環境・経済・社会のつながりを象徴するシーフード、水産物を未来の世代に豊かな状態で残していきたい、レガシーにしていきたいとの思いです。

出張でよく欧米市場にも行きます。持続可能な漁法で捕られたり調理されたりした魚であることを示す、MSC を代表とするエコラベルがないものを探すのが難しいマーケットもたくさんあります。水産大国、魚食大国の日本でこそ、こういうムーブメントをつくり、マーケットを変えていきたいと、活動しています。

主に小売りとか、水産会社、飲食店、そういったところに対してサステナブルシーフードの調達、あるいはトレーサビリティ体制の確立、このような問題に取り組む NGO たちと協

力しまして、プラットフォームの役割をやっています。

また、たくさんの複数の国際的な NGO、あるいはプラットフォームと協力をしています。世界水産物持続可能性イニシアチブ「GSSI」の運営理もしています。2017年9月から始まった、内閣府の規制改革推進会議水産ワーキング・グループの専門委員もしています。

## 五輪契機に

17年10月27日に東京の新宿で、サステナブルシーフードシンポジウムを開催させていただきました。約400人弱の方々にお集まりいただいて、40人弱の国内外のフロントランナーの方々、ビジネス、研究、行政、たくさんの方々に来ていただいてこれから日本でどのようにサステナブルシーフードをつくっていくかというような議論になりました。

今年が3回目で、年々サステナブルシーフードマーケットの成長、膨らみ、定着、そういったものを感じました。

その結果は、水産業界新聞などでも大きく取り上げられています。そのうちの一部ですが、日本最大手の小売りのイオン、大手の西友さんもサステナブルなものに取り組む。あるいは、パークハイアットホテルでも持続可能性を重視しているというような、イニシアチブがどんどん出てきてきました。

そして、東京オリンピック、2020年の五輪を変化の契機にしていきたいよね、と盛り上りました。

オリンピックは環境を大事にするとか、サステナビリティを大事にするというところが基本精神にあります。いい例が2012年のロンドンのオリンピック。これはサステナブルシーフードオリンピックとして有名ですが、実際に向こうでのソウルフードであるフィッシュ&チップスに使われる白身魚をサステナブルにしようという動きが成功しました。

輸入ものではなく、国産の白身魚を扱おうと。国内の漁業者にMSC、エコラベルを取っていただいて、それを浸透させようということがなされてきました。

2020年、日本でもやはりオリンピックにたくさんの外国の方々もいらっしやると思えますけれども、そこで皆さん、日本に来たらやっぱりお寿司を食べますよね。しっかりしたシーフードというアイコンが日本にはあるので、それをサステナブルにしていこうということが一つ大きな動きになると思います。

## 日本はマイナス成長

この登壇で、私は3つについてお話をさせていただきたいと思います。1つ目が日本の水産業界が持つポテンシャルです。漁業先進国では水産業は成長産業となっています。現状の水産業の規模と2025年を資産的に比較してみると、多くの国々ではプラス成長している。ただ、日本はマイナスなのです。

日本では、水産業が成長しているとか、大きいというようなイメージがすごく定着してい

ますが、実は世界と比較すると、一人負けしてしまっている。それはなぜなのか。日本のまわりにも魚がいなくなってしまうている。漁獲量はマックスのときよりも半分から3分の1ぐらいに減ってしまっていますし、資源状態も良くないものが多い。そこに対して十分な資源管理、資源評価がされていないというのも現状です。

それをどういうふうに戻させていくか。多くの水産先進国では、生産とか流通とか消費とか、そういうものを支えるものが環境生態系資源というものであるというような意識が文化として定着している。そして、ビジネスに定着しているということが挙げられるかと思えます。

マイナス成長してしまっているところは逆に、生産、流通、消費をいかに続けていくかのためにこの下の土台である部分、環境生態系資源に負荷をかけすぎてしまっているという状態が挙げられます。

やはりこれを機に日本でももっと環境生態系資源、この土台の部分の部分をいかにつくっていくかが大切です。

ビジネスは基本的には競争だと思いますけれども、健全な競争をすることができるために、環境生態系資源の部分を、競争ではなくて協力し合いながら土台をしっかりとつくるかということなのです。

## ポテンシャル

日本は親潮、黒潮がぶつかり合って豊富なプランクトンが生まれる、世界三大漁場にカウントされているほど豊かな漁場もあります。少し我慢すれば回復する確率はとても高く、ペースも速いだろうと思えます。

そういうところに向け、大きなポテンシャルが今、動いてきているかなというふうに感じているところを8つ考えました。

2017年の水産基本計画で、資源管理をきちんとしようと、科学研究機関をもっと独立させようと明記されている。大きな期待が持てると思えます。

Society5.0、これは内閣府主導で出されているが、日本の水産業の成長産業化のために、IT、ICTをもっと活用しようというようなことも明記されています。

2017年は海外の違法漁業由来のものが日本の市場に入っていないようにという措置の一環として、政府が違法漁業防止寄港国措置協定に加入したということも一つ大きなステップアップだと思います。

内閣府の規制改革推進会議の水産ワーキング・グループも立ち上がり、そこでも資源評価、資源管理をしっかりやろう。

サプライチェーンを見直して、流通構造を見直して、きちんとトレースできるような体制をつくらうというふうな議論も進んでおります。

日本国内でもマーケットイニシアチブが生まれ、サステナブルなシーフードを扱う需要が増えてきているということを感じます。

国連が定めた 2030 年の SDGs、Sustainable Development Goals では、14 番に海を守ろうというところは明確にありますし、それを達成するために、サステナブルに調達して消費するというためには 8 番、経済成長、水産業をもう一度成長させようというところは 12 番、つくる責任、使う責任。サプライチェーンをしっかりとさせよう。それを達成するためには、やはり独自でそれぞれバラバラにやるのではなくて、17 番、パートナーシップをもって達成させようというものが世界的な枠組みで広がって進んできております。日本でも SDGs に取り組む企業はどんどん増えてきています。

### マーケットのイニシアチブ

二つ目は、国内外で進むマーケットイニシアチブです。先ほども紹介させていただいたように、欧米のマーケット、特にヨーロッパの北のほう、アメリカだと西や東の海岸のほうのスーパーマーケットに行くと、どこでもエコラベルが普通に並んでいる。あるいは、スーパーマーケット自体が調達方針を消費者に公開して、うちで買うものだったら 100% 全部サステナブルだよということを約束するというのがたくさんあります。

大手の小売りとか、水産会社が明確に何年までに何を達成するという調達目標、調達方針を公開するというのが特徴かなと思います。

それは、スーパーマーケット、企業単体でできるものではないので、欧米では NGO との連携がすごく大きな部分を占めております。欧米主要小売りにアンケート調査をすると、主要小売りの 84% が何らかの形で NGO と協力をしている、パートナーシップ提携を結んでいます。

グリーンピース (Greenpeace) という国際組織は、スーパーマーケットがどれぐらいサステナブルシーフードに取り組んでいるかということランキングするものを出しています。これを、毎年やっていくと、どこの会社もビリにはなりたくない。できる限り高いところにいたいというところで競争し合って、どんどんサステナブルなマーケットが膨らんでくるというような結果が出ております。

この右側の缶詰、これ、全部カツオの缶詰です。こうやって企業が、小売りなどが動き出すと、もっとサステナブルなシーフードが欲しいという需要が生まれる。そうなる缶詰をつくる側も、じゃあ、よりサステナブルな原料を使ったカツオの缶詰をつくらうとなる。いくつも缶詰メーカーもちろん当然あります。これ、ほんの一例ですけども全部一本釣りということをやっています。pole - and - line と書いてあるのは一本釣りということです。

世界最大の缶詰会社のタイ・ユニオンは、タイに本社がある。この会社もつい数カ月前に、サステナブルな缶詰の生産をしますと宣言しました。違法漁業のものは取り扱わないとか、トレーサブルなものしか取り扱わないとか、きちんとサステナビリティを確保するとかいうようなコミットメントを出すわけですね。

そういうマーケットリマンド、マーケットイニシアチブによって、取り組みが始まりますし、一本釣りなどの漁業をずっと続けられた方々にとっては、マーケットによりやく需要が

膨らんでくるというようなのがこのマーケットイニシアチブによってできてくることだと思います。

### 日本のマーケットは

日本でもこのマーケットイニシアチブは少しずつですけれども広がっております。イオンは、MSC、ASC の商品をたくさん扱っております。

日生協さん、コープは、2017 年は 16 年に比べ、MSC、ASC の商品の扱いを 4.5 倍増やし大きく成長しています。パークハイアットホテルは、取り扱っている水産物の半分以上を 2020 年までにサステナブルにすると約束し、そのうちの一定数を MSC、ASC によって確保すると公開しています。西友さんも環境に優しくおいしい海の恵みをとということで、消費者に啓蒙活動している。そういうスーパーやホテルだけではなくて、東京のレストランでもサステナビリティをうたっている店が出てきている。

先ほどから出てきている MSC は、世界で最も信頼されていて認知度のあるエコラベルで、このラベルがついていけばサステナブルだというものです。日本ではまだ一部のところでしか見ることができないという印象ですが、実は世界で流通されている白身の約半分はもう既に MSC 認証されているとか、天然の鮭においても世界で約半分が MSC の認証を取っているか、本審査中であるという状態で、本当に世界では圧倒的な認知度を持っています。

もちろんその MSC を目指す漁業者さんたちもいっぱいいる。その努力をサポートしたり、その努力を評価したりするのが国際一本釣り基金 (IPNLF) の活動です。日本ではオーシャン・アウトカムズという NGO が、MSC に向かって努力される生産者をサポートするという活動もしています。

### プラットフォームの重要性

NGO との連携が大事だということに加えて、企業さんたちが今、どうしても単体だと限界があると、どうしたらいいかというところで問題意識を共有する組織がプラットフォームをつくるという動きが広まっております。

目的によっていくつかあります。例えば、シーフードタスクフォース (SeafoodTaskForce) という国際的なプラットフォームは、これはタイで生産されているシーフードを調達している世界中の小売りですとか、水産会社、あるいはそこに関わる NGO なんかがプラットフォームをつかって、タイの生産をもっとサステナブルなものにしていこう、もっとレスポンスブルなものにしていこうというような取り組みです。

イギリスをベースにしたスーパーマーケット、小売りの集まりもあります。小売り同士が集まってどういう調達方針をつかっていけばよりサステナブルになるかというようなものをみんなで話し合ったりします。やはりこれからの動きとしては、どんどん広げていくのは、すごく大事ななというふうに思います。

カツオ資源回復に向けては、西側の太平洋の資源管理を担当するのは中西部太平洋まぐ

ろ類委員（WCPFC）という国際機関ですけれども、ここでどれだけアピールし、決定させていくことができるかが課題だと思います。

一つ思うのは、人工集魚装置（FAD）の問題です。たくさん魚が FAD で集められ、太平洋の暖かいところで、熱帯地域で取られてしまっている。やはり取りすぎの原因になるので、FAD の規制強化は、流れとしてはもう WCPFC の中でできていますので、そこをきちんと強化させていくというところに日本の代表団も貢献していくべきです。

島嶼国の国々では、違法漁業とか、きちんと規制を守られていない漁業に対して、それを監視して、それを追放させるというような動き、その監視をすることができるキャパがまだないので、そのキャパをつくってあげるというところに貢献していくというところがいくつか考えられるところかなというふうに思います。

アメリカのフィッシュチョイスは、消費者啓蒙とか、マーケットに向けて取り組む NGO です。この指標では、中西部太平洋、カツオ全体の約 40%、約半分ぐらいが持続可能でない状態です。FAD が使われている。残り約半分がもう少し取っても大丈夫かなという状態なのです。この状態を増やしていく。あるいは、MSC も取って緑のものにしていくというところが、マーケットワークとその WCPFC を通じたポリシーワーク、両方にとってその歯車がかみ合えばと思います。

### 終わりに カツオを「アイコン」に

2020 年のオリンピックに向け、やはりカツオをそのアイコンにするのはいい。和食のベース、欠かせないのはカツオですので、そういうところをアイコンにしていってムーブメントをつくるというのもすごくいいかなと思います。

ちょっと長くなってしまいましたけれども、私の発表はここで終わりにさせていただいて、この後、そのまま国際一本釣り基金のジェレミー・クローフォードさんに実際にどのように IPNLF がモルディブとかインドネシアとか、そういう政府に対して活動していくのかというところをご紹介いただきたいと思います。

## 基調講演①の補足コメント

ジェレミー・クロフォード（IPNLF 東南アジア支部長）

「国際一本釣り基金（IPNLF）の活動について」



### 自己紹介

ご招待いただきありがとうございます。ロンドンに本部がある国際一本釣り基金の東南アジアの支部長をしているジェレミー・クロフォードです。IPNLF とは何であるか。沿岸漁業とそれに関わる海洋やコミュニティの持続的な未来にコミットするというのがビジョンでございます。私たちの組織が守りたい、残したいものは、**One-by-One** 漁業です。1つの釣り針で1匹の魚を釣るというようなものが大事だと思っております。

一本釣とか、手釣りとか、そういったものが **One-by-One** 漁業です。ヨーロッパ、アメリカ、島嶼国、いろいろなところでその一本釣りは行われています。その起源は、もともとの技術は日本から世界中に伝わっていったというふうに言われております。いろんな種類のまぐろを取っているいろんな種類のまぐろのプロダクト、商品をつくっています。世界の漁獲の約10%が一本釣りや手釣りによって生産されています。

IPNLF は 2012 年にできた組織です。政府に対しての提言、あるいは生産者と一緒にマーケットをつくっていく、生産者をサポートする活動をしています。使命は、その手釣りによる環境に優しいものを世界中に届けるというところ、環境と人の社会に優しい一本釣りを世界中で広げていくことです。

### 地域が大事

海的环境だけではなくて、地域の経済、地域の文化、それが大事だというふうに思ってい

ます。それをやっていくために、私たち4つの活動を軸にしております。

持続可能な漁業を支援する、その一環として MSC 認証の取得に向けてのサポートをしております。生産者、あるいはマーケットのプレイヤーと一緒にすることで資源管理、管理の部分ですね、政策の部分強化させていくというところもやっております。科学も欠かせないものです。きちんとした科学、データを出すことによって自分たちの政策提言がしっかりしたものになるというふうに思っております。

繰り返しになりますが、海と社会に対して優しいものをきちんとマーケットに届けることもやっています。

私たちの組織の特徴は、たくさんの組織とパートナーシップを組んでいます。サプライチェーン上のあらゆるところ、小売り、水産会社、加工会社、流通会社、あるいはファストフードレストランなんかもパートナーになっております。

需要をつくって供給を広げる。供給があることによって需要が生まれる。その両方をやっています。メンバーの数がどんどん増えている状態です。なぜ一本釣りの商品の需要が増えているのか。一番最大の理由は、地域での雇用を生み、地域社会が豊かになるというところにあると思います。

歴史のある一本釣り漁業を続けていくこと、広げていくことによって、地域社会、地域経済の成長、発展につながるというところなんです。

環境負荷が最も少ない漁法だということも挙げられます。混獲率が少ないこともすごい特徴です。絶滅危惧種とか、保護すべき種類の魚や生き物が混獲されないというところが大きいところだと思います。まき網なんかと違って群れを一網打尽にするというところもないので、群れの中のたくさんの魚が海に残る。そうすると卵を生んでまたそれが再生産されるということも守られます。

## 選ばれる一本釣り

サステナブル調達とコミットメントをする企業さんたちはたくさんありますけれども、そのコミットメントを達成させるために、一本釣り漁業がいいと選ぶ企業さんたちが増えています。

環境負荷が少ないとか、地域経済のためというだけではなくて、やはりストーリーがしっかりあるものも一本釣りの特徴なのかなというふうに思います。それがまたマーケットに求められているものです。

NGO の活動も無視できないものです。環境の側面、あるいは社会の側面によって、そういうところに影響の少ない魚を扱うようにというプレッシャーは NGO から企業にあります。それを達成するための一つの最も良いものとして一本釣りがある。

ただ単に環境負荷の少ない魚をつくる、生産する、提供するというところだけではなくて、この全体の問題を解決するために、IPNLF、私たちの組織が機能しております。世界のまぐろ・カツオの需要を一本釣りだけで賄うというところは非現実だとは思いますが、

もっと多く一本釣りが増えていくと、環境負荷の多い漁業が規制されていくという動きができるといいと思っております。

### モルディブでの活動

私たちの活動の一例がモルディブです。モルディブの漁業、カツオ一本釣り、MSC 認証取得をサポートしました。プライベートセクター、そのビジネスと連携をして、行政も含めてカツオの資源状態がどうあるのかというデータを収集し、資源管理を強化して、地域国際漁業資源管理機関に影響を与えたというところです。

データを取るというところから始めたわけですが、さまざまなデータ、それまでは、一括されていなかったものを収集して一つのものにまとめました。漁業者に対して、海洋学であるとか、環境学であるとか、データを取るとはどういうことか、サステナブルとはどういうことかというような教育プログラムも行いました。特に次の若い世代の漁師に対して行いました。

MSC だけではなくて、フェアトレードという認証取得にも貢献しました。フェアトレードは、社会的にきちんとしたフェアな労働によってつくられた商品だということを担保するものです。それによってまた地域コミュニティを守っていくというところにもつながるわけです。

さまざまな国際漁業管理機関でも IPNLF はアクティブな役割を担っております。それぞれの政府代表団に対してのロビイングも行っております。このような機関では、往々にして大規模な商業的な漁業が、優先される傾向があるので、やはり地域、小規模、一本釣り、そういったところの声もしっかり届けるため、その声を集めて声を大きくする活動をしています

繰り返しになりますけれども、一本釣りだけで世界中の需要を賄うことはできません。けれども、より広がっていくと、サステナブルなものとしてより広がっていくというところが大事なことで、そうなるというふうに信じております。生産者、ビジネス、それらと連携して、これからもこういう活動を続けていきたいと思っております。

日本の皆様、高知の皆様、カツオ県民会議というイニシアチブは、素晴らしいと思います。世界中であるこういったイニシアチブと連携をしていって、声を大きくしていくというところ、大事だと思いますし、貢献したいと思っております。私たち、ここでのコラボレーションを築くことができますことを願っております。ありがとうございます。

### 基調講演②

「我が国のカツオ資源管理－WCPFC に向けて」

田中健吾水産庁資源管理部参事官

1985年に水産庁に入庁。独立行政法人水産総合研究センターの本部経営企画室長、水産庁国際課漁業交渉官、漁業調整課首席漁業調整官を経て、現在は資源管理部参事官として、かつお・まぐろ類、さんま・さば類の国際交渉を担当



## 自己紹介

私は、いろいろな国際漁業条約を担当しておりますが、このわが国周辺海域を含みます西側の太平洋におけるかつお・まぐろ類を管理しております、今まで何度かお話が出てきております中西部太平洋まぐろ類委員会（WCPFC）の担当も務めています。

## カツオの現状

はじめに、中西部太平洋におけるカツオの現状でございます。2014年までのデータですが、300万トン以上が漁獲されていて、そのうち8割近くを太平洋で漁獲している。太平洋が一番重要な漁場ということになります。ペルーアンチョビー、スケソウダラに次ぐ世界第3位の漁獲量を誇っているということからも、世界的に見ても非常に重要な水産資源であるということがわかるかと思えます。

次に太平洋におけるカツオの分布です。熱帯水域から温帯水域にかけて広く分布しており、その中央部に産卵域がありまして、そのまわりに分布域がある。そして、漁場としては分布域と当然重なってくるわけでございますが、中西部太平洋の中の南太平洋の島嶼国の地域、そして、日本の沿岸と広く漁場が広がっていて、まき網、一本釣り、ひき縄などで漁獲をされています。日本の近海と熱帯水域、特に太平洋島嶼国のEEZやフィリピン、インドネシアといったところが漁場になっている。

カツオについては1980年以降、漁獲が全体として急激に増加をしております、今年年間200万トンほどの規模になっており、その大部分がまき網によるものです。

竿釣りににつきましては、横ばい、ないし近年は減少傾向が続いているというのが、世界的な状況ということになっています。

圧倒的に島嶼国の熱帯海域での漁獲が多くて、日本近海での竿釣り、まき網は全体の約

4%という、相対的に見て非常に小さい割合になっています。

次に日本近海の漁獲の推移を見ていきたい。2016年の漁獲量は、トータルで3.4万トン余り。過去10年の平均が大体5.5万トン、2015年が4.7万トンぐらいでございますので、近年、やはり減少傾向が続いておって、なかなか歯止めがかかってこないというところがあるのではないかと考えております。

このうち、ひき縄に焦点を当ててさらに漁獲量を見てみますと、これにつきましても2000年以降、右肩下がりの傾向が続いている。

高知、和歌山、三重の3県の2016年の漁獲量は、353トンということで非常に低水準になっておりまして、2014年に過去最低を記録するなど、漁獲の減少が非常に顕著になっています。カツオの水揚げ量の経年変化でございますけれども、ここにありますように、近海の竿釣り船につきましては、大体平年並みということでございます。一方で沿岸のひき縄については、いずれの海域につきましても従来のレベルから大きく減少してきているということでございます。

日本の沿岸における状況について、太平洋全体で見たときにどのように捉えられているか。日本近海では、漁船の隻数も減少し、漁獲量も低迷しています。そして、沿岸のひき縄につきましては2000年に入ってから継続して減少を続けています。

一方、インドネシアやフィリピンといった周辺では、この漁獲の水準が増加しています。この中では小型魚の漁獲もかなり続いています。そして、熱帯水域、いわゆる島嶼国の水域では漁獲量が増加を続け、隻数、あるいは、漁を取る能力についても年々設備の更新などによって増加傾向にあります。

### 認識のギャップ

これまでの資源評価でも熱帯域に関して過剰漁獲でもなく、乱獲状態でもない良好な状態にあるという結果が出ており、これが日本近海と熱帯水域との間で状況、あるいは、認識というものがまったく異なっているということ、まずご理解いただきたい。

WCPCFは、2004年に設立をされまして、わが国は2005年から参加しています。事務局は、ミクロネシア連邦、南太平洋島嶼国の中に所在しています。参加メンバーは、26カ国、地域がございます。このうち、いわゆる島国が、数的にも大半を占めています。特にミクロネシア、パプア・ニューギニア、パラオといったミクロネシアエリアの国々ですね。それからあるいは、ソロモン、キリバスといったような国、こういったようなところで非常によくカツオが漁獲されているということでございます。

WCPCFの加盟のメンバーを分類すると次のようになります。

日本をまず除きまして、遠洋はえ縄・まき網漁業国という立場からアジアの三カ国地域が参加しています。

あとは、まき網漁業主体の先進国ということで、米国、それからEU、欧州共同体、それからあとはフランスの海外領土というのが参加をしています。そして、沿岸の零細漁業のみ

が参加しているという形でカナダ。そして、島嶼国以外の沿岸途上国ということで取られている国がフィリピン、インドネシア。それ以外がいわゆる島嶼国、16カ国ということになります。

## 島嶼国の主張

繰り返しになりますがこのように、圧倒的に全体として島嶼国のほうが力が強く、しかも彼らは FFA、フォーラム漁業機関というふうに申しまして、漁業のための域内のその漁業機関を設けまして、常に連携して同じ立場でこの交渉にあたってきています。

また、その中でも特に発言力が強いのが、その FFA の中から先進国、あとは若干そのほかの島国を除いた主要な島国から構成されますナウル協定国の PNA メンバーですね。彼らというものがやはりまた非常に強い力を持っていて、彼らがカツオの良い漁場を持っているということから、非常に無視できない存在ということになっています。

わが国もこれらの国とはそれぞれ入漁協定を結んでおりまして、日本の漁船がこれらの国の 200 カイリ以内に入漁して、入漁料を支払ったうえで操業して日本へカツオやマグロといった魚を供給しています。

この加盟メンバーについて、カツオを巡る立場というのが一体どういったものかというのを簡単にまとめてみました。まず、日本の主張といたしましては、これはまさにわが国沿岸、高知県をはじめとしますカツオの来遊量の減少というのは、島嶼国がある熱帯水域における大型まき網漁船の増大が原因であるということを一貫して主張しています。

また、2013 年に、この発展途上国であります島嶼国以外の国に対して、大型まき網船の隻数を凍結するというものが合意されましたが、依然としてこの島嶼国での大型まき網船が中国、あるいは台湾の資本を借りて増加しており、そのまき網の増加が特に島嶼国の中で、残念ながら歯止めがかかっていないという状況があります。

たとえその資源が良好だとしても、分布のその一番縁辺部にあたりますわが国沿岸、あるいは、グアムといったようなところも、こういったような分布の端のところへの影響というものもきちっと考慮しなければいけないという主張をずっと、粘り強く続けています。

他方、太平洋の島嶼国は、一言でいうと、カツオは北緯 20 度を境に南北で別の資源であるということで、その北側で起きている、「日本を含む水域で起きているその不漁の問題というのは、熱帯水域の問題ではなくて、日本国内の問題だ。自分たちの大型まき網船による漁獲増というものはまったく関係がない」と話しています。

「まき網船について管理をしてないのではないか」という指摘に対しては、彼ら島国の中では、「きちっと船の数とそれから 1 年間にそれぞれの船が操業していい日数というものを割り振って、きちっと制限して管理をしているのでこれ以上の制限や規制は必要がない」というふうな立場を取っているということでございます。

それ以外のメンバーについては、まき網漁船の削減の必要性については否定しないということでございますが、その実際の削減の矛先が自分の国に向くと、途端にやはり非常に後

る向きになります。

アメリカは日本と同様の来遊減少の状況にあるグアムをはじめとする北マリアナ諸島については、同じ立場を取っていますが、やはり全体としては島国の中で、アメリカのまき網船団が操業しているので、それに規制強化が及ぶということを恐れるということで、なかなか積極的に発言してこない状況にある。

## 資源評価の問題

とはいえさまざまな議論の結果、一部はそれが実った形で措置が講じられてきています。かつては「カツオは無尽蔵で湧いてくる」と言われるようなこともありましたが、2012年には初めて保存管理措置の対象になりました。2013年には、先ほど申し上げましたように、島国以外ではあるが、大型まき網漁船の隻数を抑えるということに合意しています。2015年にはカツオの長期管理目標を初期資源、その漁業がまったくなかったときを100とした場合の資源量に対してどこまで資源を回復させたいのかという管理目標について、暫定的に50%ということに合意しています。

カツオに関して積極的に議論を進めることについて、さまざまな国からの抵抗、あるいは、いくつかの国からの無関心もある。日本政府としてもう一踏ん張り進めなければいけないというところにある。

WCPFCにおける資源評価は、カツオについては、太平洋共同体事務局（SPC）に資源評価を委託しています。その結果をWCPFCの科学小委員会で議論をするが、SPCは残念ながら日本はメンバーではなく、参加ができません。

加盟国がその資源評価作業そのものに参加することができないという状況にあります。具体的に、その資源評価の結果が提出されて、その資源評価の結果をもとにした資源状態の決定と管理勧告の作成について、科学小委員会の中で初めて出てきた結果をどのように上部の本会議のほうに上程していくかということについてだけ議論することができます。

一方で、この科学小委員会の議論については、水産研究・教育機構のほう为主体となって参画をしております。水産庁のほうからさまざまな資源の、特にカツオを含めまして資源の評価や調査といったものを行うことを委託をして、それに各都道府県の研究機関、あるいは大学、民間の企業の方等の調査協力もいただきながら、日本としてはこのような評価の考え方もできるのではないかと、あるいは、そのSPCが出してきた資源評価というのは、こういうところでやはり科学的に正しくないのではないかと、こう考えたほうが正しいのではないかとというようなことで、科学小委員会での議論に強力に参加をいただいています。

資源評価に必要な情報は、海の中にあるものなので、なかなか把握することができないので、魚を取ったときの情報、あるいは、魚を取る船の数の情報、あるいは取れた魚の大きさなど。いわば、標本抽出調査みたいなもの、人間でいえば人口の動態調査のようなものかと思えます。

そういったような形で、可能な限り正確に推定をするということで、なるべく多くの生物

情報、漁業情報を入手しながらその中で資源の状態、あるいは評価をしていくということをやっています。

### 国際的なカツオの議論

科学小委員会の中での資源に関する議論がカツオについてどうなっているか一例を挙げたいと思います。2014年の産卵親魚量の推定値を、いくつか評価するときの仮定を変えてみました。どのケースでも資源は増加傾向を示してはばらつきがありません。

それに対し2016年の評価というのは、増える結果ではあるんですけども、非常にその将来の評価について、データの取り扱い方などによって大きくそのばらつきが出てくる。

これは、標識データの取り扱いにある。具体的に言うと、カツオの幼魚にタグを取り付けて、それを再度放流する。その放流した魚がどこで再度捕獲されるかということをもとに移動を把握したり、あるいは成長を把握したりするということを知るデータです。

これは特に移動に関して極めて重要なカギを握るデータということになるわけですが、残念ながらこのデータについて、その扱い方によって資源量の推定値が大きく変わってくる。

まずこの標識放流のデータについて、きちっと取り扱うことが大事になってくるということと、あとは標識放流のデータをできるだけ多く集めることが重要になってきます。

以前ほど大きい魚が取られていないということになるのではないかというふうに考えられる。先ほどの14年の結果と16年の結果を比較して見るとわかるように、2014年については、資源そのものは良好けれども漁獲は増加傾向、資源量は減少傾向というふうにされました。一方2016年の直近のこの資源評価の結果では、何通りかの計算をして、その結果をSPCのほうは披露しました。

SPCのほうは、その中からカツオが増加に転じて漁獲圧は減少傾向にあるということが導き出せるような資源評価だけを1個だけ取り出して、それを今回の結果とすべきだという勧告をしているわけでございます。

これに対して、日本、中国、台湾は、今回の結果だけでは一つに決められない。資源が本当に良好な状態にあるのか。あるいは、本当にその漁獲圧も資源量も好ましい状況にあるのかということについては決められない。きちっとその範囲を定めて示すべきではないかと主張しました。ここで対立して、科学委員会のレポートは両論併記という形で終わりました。科学委員会の中でこういったような形で意見が分かれてつくられるということは、比較的珍しいことだと思っております。

### 日本政府の取り組み

資源評価で特に何が問題になっていたかということについて1つ申し上げます。

カツオの成長に関する式というのがあります。これによって資源の量というのを見積もるときの親の大きさとか、それからあとはそれより先の魚の大きさというものが大きく変

わってきます。現在用いられている成長式というのは、上のほうに線が伸びているわけでございます。

それに対して日本は耳石のデータ、魚の耳の中にある年輪みたいなもので、その線の数を数えると魚の年がわかります。この耳石のデータに基づいた成長式を提唱しております。これによると成長が、現在用いられているものよりもそんなに早くない、もっとゆっくり成長しているはずだという結果になっております。これによりまして大きく評価のところの一つは影響してくるということになっております。

耳石をもっとたくさん魚について集めて年齢を査定していくという処理をしていく必要がありますので、そういったようなものを統一的にやっていくために、科学委員会の中でこういったやり方をみんなでやりましょうといったことを提唱していくための技術文書というものも提出する予定にしています。

もう1つは、海域区分と移動の妥当性です。今は、熱帯域と日本がある北海域の間での資源の交流がまったくないかのような結果になっております。これは一言で申しますと、その海域の区分の仕方が悪い。亜熱帯海域というのがあるわけでございますけれども、ここから北海域に移動するもの、あるいは熱帯域に移動するものという交流がかなり多いということが、切り方を変えると明らかになってくるという面もあるので、そういった現実的な移動回遊がちゃんと反映できるような海域の区分の仕方というものも考えろと言っています。そのためには、当然その海域間での移動がどの程度あるかということについてちゃんと調査しなければいけません。

これについて日本として大規模な標識放流調査の実施をやっていくことを進めています。

日本近海と熱帯域でのカツオの取れっぷりというものがまったく異なります。それに対して、やはりこういったような相反する状況を科学的に説明していく必要があります。

そのためには、標識放流調査を日本が主体になって強力的に実施し、最終的に資源評価の取りまとめを行います SPC とも連携をする予定にしています。

成長式の話。それからあとは、産卵域や孵化海域の推定のための仔稚魚分布調査を実施すること。それからあとは、分布域縮小に関する研究といった調査研究を日本としてさらに一層続けていくということにしています。

資源評価結果について両論併記で合意に至っていないということから分かるように、残念ながら島嶼国と、日本、台湾、それから中国といったような漁業国との間で対立的な構図ができてつあります。

## 今後の対応

最後に、今後の対応について。2017年12月にWCPFCの年次会合がフィリピンのマニラで開催されます。そこで、今のカツオを含む熱帯まぐろに関する管理措置の見直しが行われる予定です。われわれとしては、この見直しの議論の中でカツオについてわが国の主張が

どれだけ反映させられるのかということについて、従来にも増して粘り強く交渉していきたい。

あわせて、ほかの魚にも関連してきますけれども、カツオ資源の回復に貢献するような熱帯水域におけるまき網漁業の規制強化を目指していきたいというふうに考えています。

国際会議について、日本はカツオについて従前から取り組みを進めていますが、なかなか島嶼国との間で理解が一致しないということについて、太平洋クロマグロの話とちょっとリンクして、島嶼国がカツオで日本をいじめるために譲らないのではないかとというようなことを、よくいろいろな新聞やテレビなどでもご意見を頂戴している。

これに関しましては、2017年8月の太平洋クロマグロを扱う小委員会である北小委員会、その次回回復目標を国際的な標準である、漁業がない場合を100とした場合の資源量の20%という水準に日本も応じています。

また、そのもう1つよく伺うご意見について、太平洋クロマグロの資源評価を行っているISCの議論は恣意的ではないかという意見もある。その北太平洋まぐろ類国際科学委員会は従来からある科学機関ですが、ISCのほうは外部監査を受け入れたり、あるいはWCPFCのメンバー国の科学者も参加しています。さらに島嶼国地域の機関であるSPCもメンバーとして参加することができるようになってきているということで、開かれた議論を展開しています。

SPCのほうについては、SPCの関係国以外の科学者は参加できないということで、ここにあるメンバー国というのはのメンバー国全体が参加できる仕組みになっていないという意味です。また、外部の監査もされていません。

島国などからも時々こういったような意見が出ることもありますが、それについては従来からわれわれのほうは決して太平洋クロマグロの問題とは同列に扱う話ではないということと、状況もそうでありまして、またそもそも別の問題である、と話している。

基本的にこれまで批判されてきたお話については、十分ご理解をいただけるのではないかと考えています。

ただ、それにしても太平洋WCPFCにおいて島嶼国は、なかなかやはり一筋縄ではいかない国際交渉の世界でございまして、そこはやはりわれわれのほうとしては精いっぱい主張して、関係国の理解を得るように努めるということ、この場では申し上げることしかできないというふうに考えています。

## 19年にカツオの包括評価

2019年ということではちょっと先になりますけれども、カツオの包括的な資源評価が2019年の8月に実施されます。そのときに、今暫定的に漁業がなかった場合の推定値の50%まで回復させるということ、これをカツオの長期管理目標にするということになっておりますが、それが2019年に見直されますので、それまでの間になるべくいろいろな情報を集めておく。

それ以外のカツオも含めたまぐろ類の保存管理措置の見直しが行われますので、それに

向けてきちっとわれわれのほうは取り組んでいきたいと思っています。

まず科学的なデータの集積というものが第一です。科学なものでしか議論というものは進んでいきません。特に今回、この県民会議の皆様方でもこの調査や資源の問題についてもいろいろ取り組みをご検討いただいているということですので、ぜひそういったところからでもご支援をいただきたいと思います。

また、WCPFC の会議の会場にもお越しいただけますので、そういったところでもいろいろなお話や意見交換したいと思います。

○司会

ありがとうございました。では、今一度大きな拍手で田中様をお送りください。ありがとうございました。

さて、この後の予定でございますが、当初ご案内をしておりました予定を変更させていただきまして、休憩時間を割愛いたしまして後半のパネル討論に入らせていただきたいと思います。誠に恐れ入りますがご協力をよろしくお願いいたします。

この後、舞台ステージ転換を行いまして、できましたらもう直ちにパネル討論のほうに入らせていただこうと思います。少しの間、お待ちください。

## 土佐かつお&カツオ人間も県民会議を応援しています！



**土佐かつお** 皆さん、こんばんは。この後、パネルディスカッションが始まりますけども、それまでの間、お話をさせていただきます。私も「土佐かつお」という名前で県内を中心にタレント活動をしており、県民会議のメンバーに入れいただきました。

今日の会場の皆さん方に、「土佐かつお」を知っているかどうか、「漁獲高」のアンケートを取ってみたいと思います。私のことをテレビとか、ラジオで一度でも見たことがある、聞いたことがあるという方は拍手をお願いします。（拍手）ありがとうございます。会場はこの人数ですから、誰が拍手をして誰が拍手をしてないか、分かりました。

最前列の先生方以外の方は、ほとんど拍手をしていただきまして……。そうですよね、先生方、わからないですもんね、高知じゃないですから。私も高知で「かつお」という名前で高知の皆さんに愛されているのですけども。きょうは、高知でカツオと言えばこの方という、僕の大先輩であり、ライバルでもある尊敬しているあの方に帰ってきていただきました。呼んでみたいと思います。どうぞ。

.....カツオ人間登場.....

わー。初めまして。カツオ人間さん、なぜ、高知カツオ県民会議に来たのでしょうか？ カツオという名前やから、やっぱりこの会議に応援にということですよ。嬉しい！助っ人が来てくれました。

ところで、カツオ人間さん、その左手に持っているものはもしかして？ オー、オー。そう、これ。そうなのです。カツオ人間さんの趣味は一本釣りなのですが、ちょっと悲しんでいるのですよ。釣果がなかなか上がらない、カツオの数が減ってきているので非常に悲しんでいます。だから、カツオ LOVE が本気な大人たちのディスカッションと一緒に勉強し、しっかりと頭にたたき込みたいです、って。頭が半分しかないんですけども……。あつ、大丈夫だというようなポーズですね。どうして？うん、うん、なるほど。カツオだけにたたき込むのは得意だそうでございます。

**司会** ありがとうございます。土佐かつおさんとカツオ人間でした。ありがとうございます。ちょっと会場をあたためていただくということで、2人に出ていただきましたが、あたたまりましたでしょうか。むしろ冷やしてしまったところもあったかもしれませんが（笑）。さあ、それでは、プログラムを再開させていただきたいと思います。高知カツオ県民会議の活動についてパネル討論に入らせていただきます。ここからの進行はパネル討論のファシリテーター、高知大学副学長受田浩之高知カツオ県民会議会長代理にお願いいたします。

## パネル討論「高知カツオ県民会議の活動について」

〈ファシリテーター〉 受田浩之（高知カツオ県民会議会長代理／高知大学副学長）〈コメンテーター〉 花岡和佳男（(株)シーフードレガシー代表取締役／サステナブル・シーフード・コンサルタント） 田中健吾（水産庁資源管理部国際課参事官）〈パネリスト〉 竹内太一（情報発信分科会／(株)土佐料理司代表取締役社長） 中田勝淑（消費・漁業分科会／高知県かつお漁業協同組合 組合長） 西野秀（情報発信分科会／共同通信社高知支局長）



**受田** 予定していた時間が大幅に遅れておりますので、パネルディスカッションは7時5分を目安にコンパクトにまとめてまいりたいと思います。よろしく願いいたします。まずご登壇いただいておりますパネリストをご紹介します。皆様から向かって、私の右側、土佐料理司の竹内太一社長です。そのお隣が高知県かつお漁業協同組合の中田勝淑組合長です。そして3人目が共同通信社高知支局長の西野さんです。その右隣には、先ほどご講演いただきました花岡さんと田中さんにご登壇いただいております。



今日の目的は高知カツオ県民会議のあり方について、われわれが考えていること、また、多くの課題を整理し、皆さんと共有したいということが1つ。そして花岡さん、田中さんからアドバイスをいただきたい。よろしくお願いいたします。

カツオ県民会議を立ち上げるに際して言い出しっぱは竹内太一・土佐料理司社長でした。竹内さん、この1年間の動きを振り返っていただきたい。どうでしょうか、カツオ県民会議、着実に歩みを遂げていますでしょうか。

**竹内** 一言で言うと、よくここまで来られたなと、良かったなということがあります。去年の8月ごろから、受田先生と「高知の食を考える会」の岡内会長さんらで準備をして今年2月に具体化、4月のシンポジウム。5月から4つの分科会の活動がはじまりました。そうした積み重ねがあって今日があるという思いです。地元のマスコミ、また共同通信社さんには頻繁に情報発信をしていただき、県民の方にもカツオの現状を知っていただいたのかなと思います。ただ、課題は山積しています。今後活動に関するロードマップを作り、各分科会がどう役割分担するか、これからの1年間で重要だと思っています。



**受田** 竹内さんは情報発信分科会に所属していますが、分科会についても一言。

#### 4つの分科会が活動

**竹内** 情報発信分科会は「高知カツオ県民会議」のホームページ（HP）を創設した。またカツオの関連記事に関するアーカイブ機能も持たせようと進めており、これには高知新聞社さんの多大な協力をいただいている。また、こういうしたシンポジウムの採録、4つの分科会議事録も掲載し、より多くの皆様に活動内容を知ってもらおうHPができた。ただ、HPの中身は十分とは言えず、これからも磨き上げていかないといけないと思っている。

**受田** 中田さんは消費・漁業分科会を取り仕切っている一人ですが、分科会の様子を少し紹介してください。



**中田** 私たちの分科会にはスーパーや食品の商社、市場の関係者、また水産団体や漁業者が参加している。その中で、マリン・エコラベル（MEL）やMSCの普及啓発を進めるうえで消費者に美味しいカツオを提供できる流通過程の指針づくりや、カツオ漁業の漁法・歴史を県民や観光客に発信し、カツオ資源が持続可能な漁法として一本釣りの理解を広げるということ主にやっております。

**受田** このほかにも2つ分科会があり、その1つが資源調査・保全の分科会です。ここは、先ほど田中さんが触れられた調査に関して私どもでも何かお手伝いができないかということで、例えば、国際水産資源研究所と味の素さんが一緒にやっているアーカイバルタグを使った調査事業、あるいはピンガー標識を使った調査事業に予算的な厚みを持たせることを通じて調査を加速するということができないか。具体的にはクラウドファンディングなどで民意を反映させた仕組みでマイピンガーをつくと面白いよね、という話もしている

ところでは、これはまだ、県民会議のコンセンサスは得ておりませんが、田中さん、水産庁の調査にこういった民間、あるいは県民会議が支援に乗り出すということについてはどうでしょうか。

**田中** ありがとうございます。大変心強いお話だと思っています。ファウンディングのやり方など、課題はあろうかと思いますが、少しでも調査データの積み重ねが進むようになればと思っています。



**受田** ありがとうございます。それとともにクラウドファウンディングなどを通じて多くの仲間をつくっていくこと。多分、こういう県民運動や国民運動の展開では、どれだけ多くの仲間をつくることができるかにかかっていると思うので、今日ご来場の皆様にもぜひお力添えをいただきたいなと強く思うところです。

それからもう1つの分科会が食文化分科会、ここはカツオマイスター制度をつくってこういう話があり、消費分科会とも相まって花岡さんからお話のあったフードレガシーの話につながっていくんだらうと思います。MSCをはじめ、サステナブルな「食」は、われわれがやらなければいけないと分かっているのですが、消費行動に結びつけていくことが難しい側面もあると思うのですが、アドバイスいただけませんか。

**花岡** はい。まさに私の活動でも同じ課題としてあります。ニワトリと卵、どっちが先かという議論になると思いますが、どっちがイニシアチブを持つにしても、一歩進めないと回っていかないのかなと思っています。MSCの素晴らしいところは、自分たちでサステナブルだとか、レスポンシブルだということは簡単に言えますが、それを第三者が認めることが重要なところだと思います。また、それが国際的に最も認知されているところです。先ほどMELのお話がありましたが、今、MELも国際基準に持っていこうというところで努力をされているので、国際レベルになった時点でMELも有効的に使っていくことで発信力、信憑性が出ると思います。

その関連で言いますと、先ほどの調査を行うための資金を海外、太平洋の関係国からも集め、共同で調査することになれば、そのデータをどう使うかというロビイングに生きてくるだろうと思う。そういうことをこれからより戦略的にやっていけたら解決に持っていけるのではないかと思います。

**受田** ありがとうございます。ロビイングという言葉が出ました。国際交渉の場ではロビー活動が重要なのは言うまでもありません。実は今日のシンポジウムに登壇している私、竹内さん、中田さんの3人は12月のWCPFCに出席し、その雰囲気をしっかり体験するとともにロビー活動をどう展開したらいいのか、よく勉強してきたいと思っています。そういう点に関してはどうでしょう、竹内さん？

**竹内** カツオ県民会議を立ち上げたことによって県外からの応援もあり、ネットワークができています。今日も国際一本釣り基金のクローフォードさんがお見えになっています。来月のWCPFCでは国際一本釣り基金の方とお会いし、カツオ県民会議と何か一つ、コミットメントをやりましょうという提案がありました。そこからまた何か開けるのかもしれませんが。

## ホームページで発信力強化

**受田** そうですね。情報発信分科会がHPを立ち上げましたので、これを国際的な仲間づくりのツールとして活用したいと思っています。今は完全日本語版なので、これを英語版にして海外の方にわれわれの主張、目的にしているのは何なのかをしっかりと打ち込みたいという思いもあります。そういう意味で花岡さん、田中さんにもう一度マイクを向けたいのWCPFCに参加するわれわれにアドバイスいただけませんか。

**田中** どういう立場で参加するかにもよりますが、例えば任意団体で参加するのであれば、NGOの方々と同じように、いかに自分たちの主張をPRするか、自分たちの組織はこういう活動をしているということをみんなに知ってもらい、理解を求めることが重要だと思います。オブザーバーの立場では、発言する機会は少ないのですが、必ず何回かはオブザーバーにも発言をする機会は与えられます。そのとき、訴えたいことを簡潔にお話するということはあるかと思います。

**花岡** 私もWCPFCでこれまで6回、オブザーバーやNGOの立場で発言する機会は与えられました。その際には、議論されていることに有効に染み渡らせるためには、先ほどクローフォードさんも言われましたが、事前に多くの方の声を集めて発信することが大切だと思います。高知だけではなくインドネシアの一本釣りやフィリピンの一本釣りからも声を

集めるとか、国際 NGO と合同で発表していくことも効果的だと思います。議場での議論の裏も大事です。できるだけ広く仲間を集め、ネットワークをつくるのがオブザーバー参加の一番大きい効果になるのではないかと。それが広がっていくと政府代表団に雰囲気伝える、あるいは裏で伝えていくことが大切だと思います。

**受田** なるほどね。ありがとうございます。さて、WCPFC への参加がカツオ県民会議の具体的行動計画の一つとして実行に移されることになりました。これはゴールではなくて、これからがスタートですが、われわれがやるべきことは無限にあると考えています。国際交渉の場、あるいは交渉に臨む際の事前の調査、さらには仲間づくりにおいて欠かせない文化の伝承とか。とは言いながら、カツオ県民会議が本来、目的としている「高知にカツオを取り戻す。日本にカツオを取り戻す」、言い換えれば、持続可能なカツオ漁の実現というゴールに向かってわれわれはどう行動を起こしていくか、これから 1 年ぐらいの目標を立てないといけないと思います。

そこで、共同通信の西野さん。これまで幹事会などにオブザーバーとして出席、あるいは情報発信分科会のメンバーとして精力的に活動されていますが、これからの 1 年ぐらいを見据え、どんな課題があるか、挙げてくれませんか。もう直球で構いません。

**西野** それでは。私は県外人ですが、カツオから多くのことを学ばせてもらいました。県民会議に足りないところをいろいろと言わせていただきたいと思います。まず、今日、おいでになってくれた方、本当にありがとうございます。最前列は県民会議の人が多いようですが、そうじゃない方々。私たちに足りないことについてこの 1 年間、本当に熱い議論をやってきました。特に今秋からは真剣に議論してきました。このままじゃいけないと。

運動をどうやって広げていくのか、県民会議に多くの人に参加してもらい、こういったシンポに来てもらう。イベントもやっていく。皆さんには県民会議の HP をぜひ見ていただきたい。ここには既にいろんな情報が議事録という形で出ていますので、ぜひご覧になってください。



次に県民会議の今後の運動をどう考えるかについてですが、WCPFC への参加、(水産庁の)

資源調査をどう支援していくのか。クラウドファンディングの話も出ました。それから文化の伝承で言えば、若い世代にカツオの美味しさ、大事さをちゃんと継承していくためのプログラミング、例えば、小・中学校の授業用にいろいろつくっていくとかいうことも県民会議として発案しなければいけないのではないかと考えています。

それからもう一つ、WCPFCは来年もあるわけですね。来年はどうするのか、日本の交渉力を高めるためにはどうするのか。宮崎の漁師さんも一本釣りをやっているのですね。それから千葉の勝浦、焼津にもカツオで生きている人たちがいます。そういった人たちとつながり、まき網の人たちとも何らかの接点を持つことでオールジャパンの動きをつくるのが交渉力を増すことにもなるし、また、現場の人たちの思いを水産行政に反映させることにもなるというふうに考えます。

## 若い世代へ継承を

**受田** ありがとうございます。県民的な運動にしていくという点からすると、この会場を満員にするぐらいの大きなうねりを起こさないといけないと痛烈に反省をしています。さらに国民運動にまで展開するにはどうやったらできるか。ものすごく難しいのですが、われわれに課せられています。情報発信分科会を中心にさらに磨き上げていかないといけないですね。

2つ目の若い世代への継承性についてですが、中田さん、食育の授業で子どもたちに「カツオとは」という普及活動をされています。これを紹介してください。

**中田** 今年は野市小学校で小学生に向けて講義をしました。消費・漁業分科会の中村座長や私たちが小学生にまず、カツオ船の話をする。カツオの一本釣りというのは、こういうものだよということ。それから、カツオは美味しいよと食べてもらう。そしてカツオに触ってもらう、そんな活動をしています。

**受田** 昔は子どもが台所のカツオ節削りで削っていました。私もそういう世代です。ところが今、子どもたちは、あの鰹節を見ると「これ、木ですか？」って。あれが魚であることすら分からない。そこから始めて何とかこれを子どもたちに印象づけて、大切なものだと理解してもらいたい。われわれもあるとき、大学で食育プログラムとしてカツオの普及を少し手掛けました。そのときは本枯節を削って木琴みたいな楽器にしました。大変失礼なことをしているのかもしれませんが、叩くと音がするというのでトライしたことがありました。そういうふうになると、子どもたちの関心がまったく変わってくる。だから、印象を強めていく取り組みはいろいろできるのですよね。

竹内さんのところではどうですか。もともと土佐料理司として食文化としてのカツオ、そして出汁を脈々と受け継がれてきました。普及の面では子どもを含めてというふうに考え

ていますか。

**竹内** そういうのはあんまりやってはないのですが、味の素さんがやっている「和食国民会議」というのがあります、それを頼まれてうちの調理長たちが参加して子どもたちに出汁の美味しさを教えていますが、普及を目的としたものとしては十分ではありません。ただ、この会にはいろいろな企業の経営者が会員や幹事として参加していますので、そのネットワークを生かすことはできるのではないかと思います。

例えば、旭食品さんとか、うちとか、食品メーカーさん、水を扱うメーカーも多くいますので、そういう方面の方にお知恵とご協力をいただく、といったことを考えています。

**受田** なるほどね。和食を世界無形文化遺産に、という話があって今、和食が注目されています。そんな活動をしている団体が来高したことがありましたが、そのときに注目されたのが芸西村の和食（わじき）でした。この地名なら「和食のメッカになるのでは？」という話も出たそうです。いろいろなアプローチがあるのかなと思います。そこで花岡さん、ロンドンオリンピック、あるいはリオ五輪を契機にイギリス、あるいはブラジルがフードレガシーということでサステナビリティが注目され、そこから食の在り方が変わってきたという話が今日の講演の中にもありました。日本はどのようなのですか。

**花岡** マーケットの関心は確実に高まっています。お寿司の主要なものは全部サステナブルで揃えたいよね、それをアイコンにしたいよね、という声は各地から聞こえています。その実現性はあと数種類という声もありますので、可能性はあると思います。ただ、オリンピックがゴールではなくて、オリンピックを機にいかに浸透させていくか、世界に発信していくか、ということなので、オリンピックレガシーをデザインするのは今の期間なんだと思います。もっとたくさんの方々との連携、プラットフォームが必要だというふうに思います。

**受田** なるほど。そういうことをどのくらい重きを置いてやっていくか。こうしたこと巻き込んでいくこともポイントになっていくのではないかと思います。もともと国は MSC、あるいは GAP（適正農業規範）でなければ選手村の食卓に上らない、と勇ましくして話していたそうですが、その勢いが萎えきたという話を聞いて心配しています。

**花岡** オリンピック施設の中で扱う水産物や食品の調達コードをロンドン五輪に比べると、サステナブル性は緩いと思います。ただ、オリンピック施設の中だけじゃなくて開催地の東京あるいは日本全体でどう進めていくかというのは必ずしもそのコードがあってそれに則らなきゃいけないというわけではない。もっと自発的なものでいいと思います。自発的な地域がリードし、そうした地域が連携していくという形が理想なのかな、と思います。実際、ロンドンでもトップダウンで決まったわけではなく、それぞれの飲料メーカーやコン

サル会社など、一見、シーフードに関係ない企業がロンドン五輪を機に社食をサステナブルシーフードにするという宣言を自発的にやるという動きがムーブメントをつくったのです。

## 2018年 WCPFC 年次総会に向け

**受田** ありがとうございます。そういう意味では高知カツオ県民会議はいろんなお場の方々がいらっしゃるので、こういうムーブメントを起こしていくには極めていい組織ですよ。次に2018年のWCPFCに向けた課題ですが、さっき西野さんから発言がありましたが、まずは2017年のWCPFCに参加して、今後のあり方をしっかり考えようと思っています。2018年10月下旬には「全国豊かな海づくり大会」が高知で開催されます。これがわれわれにとっては大事なターニングポイントで、大会は、海の豊かさを守ろうという点で先ほど出たSDGs目標とリンクしていきます。ですから、ここを目指していきたいという認識を共有すべきだと思います。西野さん、この「全国豊かな海づくり大会」に向けて、もう少しネジを巻いてもらえませんか。

**西野** 余り難しく考えなくていいこともあります。それは、高知には素敵なイベントがいろいろあるじゃないですか。「豊穰祭」や「土佐のおきやく」、「よさこい祭り」とか。そこで「カツオが今、やばい」「カツオを守ろうぜ」というメッセージを乗せていくということもできているのです。カツオが好きだ！という気持ちを、カツオを守ろう！へバージョンアップしていく、それだけでも意味があると思います。それが何となく表に出てくる。そして、高知にカツオを食べに来る観光客の人が「ああ、そうか」と。「美味しいカツオはやっぱり守るために一肌脱がなきゃいけないのだな」というふうな雰囲気を高知そのものが持つこと、これが大事なんではないかというふうに思っています。

それから、国際的なときにはやっぱり英語の名前が必要で、今、Kochi Sustainable Skipjack Association、KSSA というのが出てきました。こういった取り組みをきちっとすることが国際的にも、あるいは国内的にもいいなと。それから今、国際一本釣り基金のロゴを見てとっても素敵だなと思いました。素敵なロゴをつくったり、バナーをつくったりすることも、いろんなところで人と横につながっていくために重要なツールだと思います。

**受田** はい。ありがとうございます。今ご紹介いただいた英語の組織名に関しては、WCPFCで登録をするために早急その名前を決めてほしいということがあり、幹事会でいろいろと相談しました。その後、異論がまったくないのが今ご紹介のあった Kochi Sustainable Skipjack Association という名称です。多分、竹内太一さんを通じて花岡さんにもご相談をさせていただきました。クローフォードさんがいらっしゃいますので、お尋ねします。突然振って申し訳ないですが.....

《クローフォード氏が英語でコメント》

**受田** Thank you very much. 今、西野さんがおっしゃったように、やっぱりロゴですよ。どうアピールできるかという意味で、ロゴは極めて重要だという示唆だと思いますが。

《ロゴに関して、クローフォード氏に英語で質問》

《クローフォード氏が英語でコメント》

**受田** Thank you so much. IPNLF のロゴって、先ほどパワーポイントで示していただきましたが、‘One-by-One’のデザインが明確に描かれていて、‘One-by-One’のフィッシングがいかにサステナブルか、そこに思いを込めているのだろうと思うのですが、今後、このロゴ制作についてはどうですか、太一さん。

**竹内** その辺は西野さんに考えていただこうかなと思っています。それとちょっと話が変わりますが、西野さんがいろいろなイベントでカツオ県民会議のことやカツオ資源のことをアピールすることは、すごくいいなと思うのです。

最近の分科会でよく話が出るのが、「何か手伝いたいけど、何をしたらいいの？」と仰っていただく方が増えてきました。これ、いい傾向だと思うのですが、その受け皿がまだできていない。これも情報発信分科会で出た話ですが、知恵を出してもらう方、労力を提供してくれる方、また事務局のボランティアの方も欲しいし、イベントのお手伝いも欲しいですね。

それから資金。資金の場合は、受田先生がよくおっしゃっていますクラウドファンディングで広く薄く集めることを考えたらどうか。活動を大きくしていくには、やっぱり資金と人、それから知恵だと思います。「私、何をしたらいいの？」という方に、具体的に「これか、これかをお願いします」といった仕組み、言わば「一領具足」で戦う部隊のような仕組みを近いうちに提案ができるようにしたいと考えている。これもやりたい、あれもやりたいと思ってもそれを担う人がいない。

## 皆さんのご支援が欠かせない

**受田** そうですね。その点はホームページ (HP) を立ち上げたとき問題提起されていて、誰がアップデートするんですかと、誰が管理するんですか、ということです。当然やらないといけなくて、アップデートされなければ、誰もアクセスしてくれません。HP の更新頻度がアクセスのポイントになってきますので、ここも欠けている部分かと思います。

そろそろ終了時間が近づいてきたので、結びに入りたいと思います。高知カツオ県民会議は立ち上がったばかりです。多くの方々がボランティアとして手弁当で分科会活動や幹事会活動に一生懸命取り組んでおられます。ですが、われわれには欠けているものがたくさんあります。ぜひ皆様のお力添えをいただき、一緒にわれわれが目標としているゴールによ

り短時間で近づけるよう、ご支援を賜りたいと切に思っています。

先ほど、ロゴの話が出ましたので、ご来場の皆様の中でデザインが得意な方いらっしゃいましたら大募集いたします。採用作品には竹内太一さんが何か賞品を出してくれるかもしれません。ご期待のうえ、お寄せいただければと思います。

今日は時間が非常にタイトで窮屈なスケジュールになってしまったことを大変申し訳なく思います。またパネリストの皆様にもせっかくご登壇いただいたにもかかわらず十分なお発言の時間が取れず、大変心苦しく思っております。このストレスはこの後の交流会でぶつけていただき、盛り上がっていただければと思うところがございます。最後まで熱心にご聴講いただきましたこと、厚くお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

**司会** ありがとうございました。パネル討論にご参加をいただきました皆様方に今一度大きな拍手をお送りください。大変お疲れさまでございました。それでは最後に閉会のご挨拶に移りたいと思います。では、「高知カツオ県民会議第2回シンポジウム」の閉会にあたり高知カツオ県民会議副会長、株式会社高知新聞社代表取締役社長、宮田速雄よりご挨拶させていただきます。

## キーワードは「持続可能」と「連携」



**宮田** 皆様、大変お疲れさまでございました。今日は長時間、最後までお付き合いいただきまして本当にありがとうございます。そして、川島先生、わざわざ遠いところ、本当にありがとうございます。さらに花岡さん、田中参事官、クローフォードさん、Thank you very much。カツオ県民会議は準備段階から含めますと一年余りになるのですが、やっところまで来たのかなと思うとともに、これから道のりがなかなか大変だなという思いでいます。

この会の特徴は、先ほども出ておりましたけれども、カツオとはほとんど関係のない、メンバーがたくさんいるということです。これはある意味ではこの会の大きな強みになって

いるのかなと感じております。これからの活動のキーワードは「持続可能」というのが一つあると思うのですね。われわれの会は、決してまき網と対立するためにできたわけではございません。このままのやり方をやっているとまき網も駄目になるのではないかと。まき網も一本釣りも、お互いに持続可能な漁業のあり方を一緒に考えていこうというのがまず、あります。それともう一つのキーワードは「連携」だと思います。いろんな方々が連携する、いろんな県とも連携する、あるいは、いろんな国とも連携する。そういった連携がうねりを大きなものにしていく。さらに消費者とも連携することも非常に大きなポイントになるのではないかと、そんなふうを感じております。

道のりはまだまだ長く、険しいと思いますが、元気いっぱい、頑張ってくださいるので、どうかご支援のほどよろしく申し上げます。今日は本当にありがとうございました。

**司会** ありがとうございます。以上をもちまして高知カツオ県民会議第2回シンポジウムを終了させていただきます。最後までお付き合いいただきましてありがとうございます。どうぞお忘れ物のないようにお気をつけてお帰りくださいませ。そして、この後の懇親会にご出席の方は、ホテル日航高知旭ロイヤル3階のゴールデンパシフィックの間へ移動をお願いいたします。開始予定時刻は7時30分です。今でしたら間に合いますので、皆様お急ぎください。本日は、高知カツオ県民会議第2回シンポジウムにお越しいただきまして誠にありがとうございました。また次回のご参加をお待ちしております。ありがとうございました

#### ○司会

ありがとうございました。

以上をもちまして「高知カツオ県民会議 第2回シンポジウム」を終了させていただきます。最後までお付き合いいただきましてありがとうございました。どうぞお忘れ物のないようにお気をつけてお帰りくださいませ。

そして、この後の懇親会にご出席の方は、ホテル日航高知旭ロイヤル3階のゴールデンパシフィックの間へ移動をお願いいたします。当初の開始予定時刻7時30分となっております。今でしたら間に合いますので、皆様お急ぎください。

本日は、「高知カツオ県民会議 第2回シンポジウム」にお越しいただきまして誠にありがとうございました。また次回のご参加をお待ちしております。ありがとうございました。